

言語と地域

——ヘルダー『言語起源論』二〇〇年記念によせて——

水 津 一 朗

「言語は地球の円い表面の上でプロテウスのごときものになる」

これは近代地理学の夜明けに、ゆたかな風土論をとなえた J. G. Herder が『言語起源論』(1) の中で述べた言葉である。かれは、言語と気候・風土との関係を、この言葉に要約した上で、つぎのような解説を加えている。「人類全体が一つの群居社会にとどまることが不可能であったように、それは一つの言語を保持することができなかった。それゆえ、種々異なった国民語の形成が必然的となる。……気候・空気・水・食物・飲物は発声器官と、当然、言語にも影響を及ぼすであろう。社会の風習と習慣という力強い女神は、身振りと作法に従ってほどなく種々の特色と相違点をもちこむであろう。これがすなわち方言である。……時代の経過とともに、基本概念の精神そのものが変化したが、こうして特有の語尾変化、派生形、変化形、前置および添加形、意味の全体ないし部分の転換ないし削除が生じ、新しい特有語法が成立した」。

『言語起源論』が世にでてすでに二〇〇年。いまここ二〇〇年間の成果を踏まえて、生活の場としての地域と言語との関係を省察してみたい。

言語は、地表に刻まれた純粹な地理的事象とはいえない。しかしそれは、地表の諸事物のはたらきをなめらかにするために、あらゆるものやはたらきと与えられた記号体系である。言語が、ものやはたらきにかかわる心像・觀念・感情、およびこれらの諸要素のある集合を描きだし、かつそれらを地表の諸機能領域内に伝えるものであるかぎり、生活の場としての地域との間には、構造上の深い対応がかくされているのではあるまいか。

構造言語学を開拓した F. de Saussure は、言語の特質についてこう述べている(2)。「チェスのゲーム全体が、それぞれ異なった駒の組合せからなりたっているのと同様に、言語も全くその具体的単位の対立を基盤とする体系であるところにその特質がある。単位が何であるかを知らずにすすむわけにもいかないし、またそれを手がかりとしなければ、一步も先へ進むことができない。その他、言語を単位に分割することは非常に微妙な問題であるので、本当に単位などというものがあるのだろうかと疑いたくなるほどである。このように考えてくると、言語の特質くらい奇妙な驚くべきものはない。一見知覚しうるような単位となる実体は存在しないようである、しかもやはりそれがあること、言語を構成するのはまさにそれらのはたらきであることを、疑うわけにはいかないからである」。

同じことが、地理学的地域についてもあてはまる。いったい、動物学や化学においては、なんの苦勞もなく単位が与えられるのに対して、言語学や地理学にとっては、この単位の設定がきわめてむづかしい。その困難をこえて、Saussure 以降の言語学は、言語の単位について美事な組織づけに成功したが、それとは独立に現代地理学においても、地域の諸単位が、ようやく一つの体系のもとに位置づけられようとしている。注目すべきことは、両者の単位の

間に、つぎのような対応があることである。

言語が語によってつくられているように、地域は農地・集落・交通路などの諸部分によってつくられている。語が音素のさまざまな形での結合であるのに対して、地域の部分はさまざまな *Fliese* や *Ökotrop* の断片からなる。音素の結合が、人間の口腔を中心としたフィジカルな諸条件に規定されているように、*Fliese* や *Ökotrop* の断片は、無機的・生態学的法則から自由ではない⁽³⁾。かつ、音素も地域構成要素も、それ自体では意味も、機能ももつものではない。言語学で、音素の結合からなる「意味するもの」としての語と、「意味されたもの」としての意味像(キ、トリ、アルブル)「意味するもの」樹「意味されたもの」との間の、構造上の関連が研究対象となるのと同様に、地理学では、地域構成要素の結合からなる無機的・生態学的単元が「機能するもの」として、農地・集落・交通路・山林など、地域の部分(「機能されたもの」)に統合されていること⁽⁴⁾について、詳しい研究がすすんでいる。

ところで、語がより集って、特定の文法に即して特定の構成をなすとき、はじめて一つの文脈をもった言語機能が生みだされる。これと同じように、地域の部分が集って、特定の地理的法式に即して特定の構成をなすとき、はじめて人間の生活の場にふさわしい地域機能が生みだされる。かつて私が、屋敷・一筆農地一字(ゲヴァン)——基礎地域という構成を示したのも、このような背景において意味をもつ⁽⁵⁾。言語において、語尾変化や動詞活用などの文法的形態に誤りを含み、結語に乱れがあるときには、完全な言語機能を果すことができないように、地域の諸部分があるべき法式に即さず、所定の相互結合に失敗するときには、地域機能は支障をきたすと考えられる。

こうした単位の問題は、一点世界を対象とする他の社会科学においては、あまりにも軽くあつかわれている。言語の構造主義的原理を社会現象にもちこもうとしたのは、C. Lévi-Strauss であった。しかしかれは、民族誌的事実

の中から、言語学や地理学の単位に対応するような各レベルの単位をとりだすことには、かならずしも成功しているわけではない。神話の言語、儀礼を構成する種々の象徴、婚姻規制、親族体系、一部の経済的交換の様式など、それを統合するコードを発見しようとする構造人類学の方法論には、「自然科学における説明と人文科学における説明との間に導入された誤った対立から、人類学を解放しよう」とする野心はあるが、われわれが人類学に期待するところのものは、こうした人類学的コードそのものが、つまるところは、各単位の生活空間の奥にひそむコード、すなわち地理的方式にまで深く結ばれていることが、いつの日にか証明されるにちがいないということである。

ひとびとは郷土の方言を話すとき、その文法や結語法をことさらに意識するまでもなく、即座にそれに即した自由な言語活動ができる。このことは、郷土での生活において、ひとびとが地理を意識するまでもなく、地理に即して安定した生活をいとなみうるという事実と深いかわりあいをもつではあるまいか。

しかし言語学にとって、このことは、かならずしも自明のことではなかった。たとえば、言語の修得については、「生成統辞論」の N. Chomsky の見解が注目をひく⁽⁶⁾。かれは、言語には先天的図式があって、ひととはそれを生得することによって、それから派生する言表を自由につくりだすことができる。 「自然に存在する諸言語の文法は……、この言葉のまともな意味における文化の産物であるかどうかは再考の余地がある。ひとつの国語の文法が要素やつながりや連鎖や新たな組み合わせなどの漸次的習得によるよりは、むしろ生得的な固定的図式の分化によってえられるということは大いにありうる。……そして、言語一般の構造にかんしてわたしたちがもっているわずかの知

識からすれば、実り多くまた本筋において正しいものであるチャンスは、理性論的仮説の側により多くあるものと信じられる」。

こうした生得性もちだすかぎり、言語と地理を結ぶ環の一部は、たちまち切られてしまう。しかし、言語の修得にあたって、内的均衡あるいは自己調整の過程があることを強調する J. Piaget の考え方をみのがすわけにはいかない。¹⁾「経験に与えられるものの観点に立つとき、言語が比較的小さく発育の第二年度の途中であらわれるという事実からして、わたしたちはまさにこのような構成主義を採用しなければならぬと思われる。……言語の修得には感覚運動的知能が前もって形成されていなければならず、この点で理性的なものに結びついた基体が必要だという Chomsky の考えは正当なものである。しかし、この知能それ自体は最初からできあがっているといたったものでは決してなく、それがいくつかの同化のシエマの漸次的な共応からどのようにして結果するかは一步一步たどることができ。そこで H. サンクレールは、Chomsky の《monolite》起源を、この感覚運動的シエマの共応に固有な反復、順序づけ、結合的關係づけ（論理的意味での）の過程のうち求めるべきと考えた」。

このことと関連して、「多様な音を奏でる神的な自然全体が言語の女教師であり、ミューズなのである」といった Herder の見解を想起する。さらにわれわれは地域調査の成果にかえりみて、つぎのように考えざるをえない。言語が生得的なものでない以上、それが修得される場としては、本来、郷土の基礎地域が予想される。そこにおける家族、さらに近隣集団との共同生活の中で、しだいに語句を学び、Chomsky のあの固定的図式をも身につけるのであるまいか。郷土の共同生活とは、その基礎地域の構成部分たる集落・農地・交通路・山林などに即したさまざまないとなみであるから、幼児たちは、まず屋内や屋敷まわりにおける感覚運動のくりかえしや、その後の人間形成期に

おける大人たちの野外でのいとなみの見聞やその模倣や手伝いの中で、数々の試行錯誤のあげくに、名詞や形容詞に
ついで動詞を修得し、ついに核文のコードをも修得するわけである。同時に注目すべきことは、それと平行して、基
礎地域を構成する各部分の独特のはたらきや配置、相互関係などについても、先祖伝来のうけとめ方が修得されるこ
とである。なお、地域の各レベルの單元には、それを指示する地名が付着し(8)、独特のニュアンスをかもしだすこ
とも珍しくない。

言語と地理とは、このように、同時に、同じ地域の中で、その地域に適應した諸体験の再組織されたものとして身
につけられる。年をへて、いよいよ言葉のひだは微妙に、土地勘は鋭くとき澄まされることになるのはいうまでもな
い。このことを悟るとき、一つの言語を話すということは、一つの世界、一つの文化をひきうけることになるという
実感がわきおこってくる。

言語も地理も、いずれも長い世代をへて、がっしりした一つの枠組みにしつらえられたものである。文法や結語法
が、一―二世代の中に急にくりだされたものでないように、地域部分の配列や相互関係などの地理的方式も、世代
から世代へと特定の地域の中で自己調整をくりかえしながらうけつがれてきたものである。言語史の成果が示すよう
に、語や文法も、結語法も、時代とともに部分的には変化しなかったわけではないが、同様に歴史地理学的研究から
して、地域構成部分の配列や相互関係にも、徐々に変化があったことが明らかである。また、語の意味内容に変化が
あったように、地域部分の意味ないし機能にも、またその範囲や地名にも変化があった。

ところで後述するように、言語上の変化は、ことやものの変化、とくにこれらの外部からの伝播にもなっておこ
ったばあいが多いところからすると、ことやものでみだされた地域の動きに即して、言語の変化が考察されなければ

ならない。すなわち柴田武が、「言語の変化は、……地域社会の人間を介在しての変化である」(9)、といったことを言語と地理との深いかかわりあいにおいて掘りさげるべき必要のあることが、いまこそはっきりと予想されるのである。われわれは、「地域社会の人間」の、そのよってたつ基底にある地域の深層において、言語との対応をよみとろうとするのである。

しかし、こうした対応にも、なお限界があるように思われる。なぜならば、言語においては、文法や結語法に誤りがないかぎり、自由に語をおきかえて、かぎりなく多様な意味を創造してゆくことができるからである。「山には木がある」↓「山には鳥がいる」「平地には水田がひろがる」「海には漁場がある」(A群)。「山には魚がすむ」「水田には馬がすむ」(B群)。以上は、いずれも言語としての誤りをもたない。

ところが地理的現象においては、地理的法式や構成上の誤りを犯さずに、自由に地域部分をいれかえることはむづかしい。微高地にある集落と低地の水田とは、いれかわることによって双方とも立地上の不利が生じやすいし、用水の取入口と排水口とをとりかえることなどは不可能に近い。地理的現象において自由な変換が困難なのは、まず第一に、地域の諸部分に特定の機能をあたえる生態学的条件が、原則として特定の場所に固定していて、たやすく動かすことができないためである。もちろん、生態学的要素が人為的につくられ、そこに新しい地域部分が成立することは珍らしくはない。隠頸泥地に外部から土砂を運搬して埋立て、そこに新田をつくったり、最近では広大な臨海工業地帯が形成された事例も周知のところである。しかし新しい埋立地の出現によって、背後の農地や住宅地の排水調整が

支障をきたすだけでなく、埋立地の工場の煤煙や汚水、騒音などによって、われわれの生存さえおびやかされてきた。このような点からして、地理的現象は、言語と比較して、はなはだ自由に乏しいものといわなければならない。果してそうであろうか。言語活動にはかぎりない自由があるといっても、しかしある特定場所における言語に視点をかざると、こうした自由も、現実にはいちじるしい制限をうける。いま海岸にある水田農村についてみると、A群は十分に成立する。山には燃料や建築用材の供給源としての山林があり、またの一部は水田に注ぐ用水の涵養林でもあろう。平地には水田があり、海に漁場があるのも自然である。しかし、B群は現実にはありえないことが多い。山にすむ魚も非現実的だし、水田では刈跡放牧すら一般的ではない。すなわち、言語活動の自由といっても、現実にはその活動のおこなわれる地域の状況によってきびしく制約される。地域の状況にそぐわない表現は、その場所の意味を伝える記号としてはたらしきを果すことができない。

Chomsky の「生成統辞論」においても、文の変形の有効性は、直観的な意味論の規準でたしかめられるのを否定するわけにはいかなかったといわれる。今日、言語学における意味論では、「言語場」とか「意味場」、「概念場」とよばれる考え方が一部で有力である⁽¹⁰⁾。「言語場」において表現されるものとして「概念場」があるが、「概念場」こそは地域の状況にも対応するのであろう。

古くから言語と風土についてよくいわれていることであるが、ここでつぎの事例をあらためて想起していただきたい。「われわれは Chameau (牡ラクダ) Chemelle (牝ラクダ)、そして時には Chamelon (子ラクダ) という言葉しかもたないのに、アラビア語の辞書にはラクダを区別する数百の言葉があって、われわれは驚きかつ理解に苦しむのだが、その理由はラクダがアラビア文明の社会慣習の中心にあり、かつあったからにはかならない」と G. Moulin

「は書いている(1)」が、遊牧と隊商を生活様式とするアラビアの乾燥地域では、フランスのように、ラクダを三種にわけるだけでは、非現実的だったのであろう。また独特の季節にめぐまれた日本において、シグレ・サミダレ・ユウダチ・ミズレ・花曇・コチ・ノワキ・コガラシ・ハシリ・シュン・タバゴロ・イザヨイなど、ユニークな情感をこめた語が発達したのも、島国の地理的諸条件と無関係ではない。

しかしこれらは、語と地域との関係を示すにすぎない。いまわれわれが、さらに深く問いつめるべきことは、つぎのことである。同じ地域で長年月かけて発達した言語の文法や結語法自体にも、その地域の地理的法式や全体の構成のあり方と微妙に対応した部分があるのであるまいか、ということである。たとえば日本では、主語というものがひじょうに薄いといわれる。主格が述語の中にとりこめられる表現法が、それである。「早く実がなれ、柿の種」「富士がみえる」などの主語は、三上章による(2)と、実は主格補語で、目的格補語や、その他のいわゆる格助詞がついた名詞と対等に並ぶものにすぎないと判断される。ところが、日本においては、地域やその部分相互を、あるいはそれらと人間とを対立的にみる考え方に乏しかったのも事実である。自他合一の感情、地域への順応の態度などは、日本独自の古い地理的式式がうかがわれる。

言語と地域との間に深い構造上の関連のあることについては、もはや疑問の余地があるまい。このことを確認した上で考えなければならないのは、つぎのことである。それは、構造言語学における言語の構造が、実は語線(chaine parlée)という場の上でくみたてられていることである。語線は、言語の本質を示唆する二つの意味を含んでいる。

一つには、話された言葉が、時間的に線状の性質をもっていて、空間的な拡がりをもつ他の諸記号とは異なるということ、もう一つは、あたかも鎖の環のような不連続な言語単位が連続して統一をもった総体をなすことである。たしかに語線は一点世界をこえてはいるが、しかし面的な拡がりをもたない。このような考え方では、言語と地域の上記のような関連は、とうてい十分には解明できない。したがって私は、構造言語学の成果を引用しながら、すでに語線の抽象性をこえていたわけである。

なによりも必要なことは、ここで語線概念を線から面へとひろげ、語線にかわる言語空間の概念を確立することで行なければならない。従来の構造言語学は、こうした事情を意識的に無視することによって、きれいな体系をうちたててきた点が強い⁽¹³⁾。語線から言語空間の上に言語現象を移すことによって、はじめてその活動は、たんなる記号交信の域をでて、「地域の円い表面の上でプロテウスのごときものになる」。

ところが、構造言語学とは種々の点で対照的な立場にある地理的言語学には、すでに方言領域の概念があり、言語の空間的把握がみられる。方言領域と地理学的地域との間には、どのような関係がみられるのであろうか。

一九世紀の史的比較言語学においては、音韻対応の規則性ということが、有力な仮説とされた。音韻は、一定条件のもとでは、すべてが同じ変遷をとげるものである、という主張である。もし「音韻法則に例外なし」ということが正しいならば、変遷を反映する方言の分布も組織的でなければならない。すべての等語線は重なって、ただ一つの線になるはずである。このことを検証しようとしたのが、G. Wenkerであった⁽¹⁴⁾。しかしかれの調査によると、期待反して実際の等語線は語ごとにことなり、一本として重なるものはなかった。

地理的言語学は、このような逆説的な事情のもとで成立した。しかし、語はそれぞれ独自の変化をとげて、一つと

して変化の仕方には共通性がないという見解は、音韻対応の規則性という学説に対する反論という形で、やや極端な表現をとったものと思われる。その後、実証研究が積み重なるにつれて、等語線相互には細部にわたる一致はえられないにしても、傾向はよく似ていることがわかってきた。これこそ、地理学的地域にひき写しの現象ではあるまいか。柴田説をとりあげてみよう。「言語の形式的・表面的な部分でも、ひとりで変わることはありえないだろうというのである。たとえ、uがiに変わるといような微細な変化でも、その変化には人間の意志が加わっているとみる。それは、その地域社会内で語原解釈という形をとる場合もあり、他の言語——方言であれ標準語であれ——との接触によって混交とか回帰とかいう形をとる場合もあるが、いずれにしても、民衆がみずから納得できる方法で納得できる言語形式に変えるのである」。「民衆がみずから納得できる方法」こそは、その生活空間の状況に即したものでなければならぬ。

かれは、糸魚川地方の方言研究の結果、方言伝播の方向とその分布について、三種の型をとりだしている。①信州から日本海へ向けて北上するもの。②また、その動きがとまって南へ押し返されるもの。③西の富山県から海岸沿いにはいりこむもの。糸魚川の町部から周囲へ伝播するもの。このようにして、糸魚川地方では、各言語現象の分布線は、伝播のルートに沿ってかなりよく似た絵模様をえがきだし、一まとまりの河谷や海岸低地に重なりあっている場合が少なくないことが実証された。とくに子供たちの創作になり易いものは、数集落を含む学区とその分布が重なる場合もある。これらの重複する範囲をもとにして方言領域を設定することができるのである。

ところで言語は、既述のようにたんに言葉として伝わるのではなく、特定のものを意味するものとして、そのものとともに伝播することが多い。「こうしてみると、どこまでが言葉で、どこからが言葉でないとはっきり境界を設け

ることのできないことがわかる。もちろん、純粹に言語形式という段階はある。『ふつうのモンペ』の里言の分布、『あいの子モンペ』の里言の分布、両者の里言がつくる体系の分布、ここまでは純粹に言語形式の世界といえそうである。しかし、地理的分布というものがすでに、言葉以外の世界にかかわるところにあるものである。その意味では純粹に言語形式だけの世界ではない。

以上のような文脈において、柴田は、地理的言語学にとって「絶対にかくことのできないものは、地域の条件である」という。ここでいわれる地域は、すでに地域社会としての意味あいをこえて、具体的に言語がものとも動く道路や峠や、言葉のとりかわされる商店や学校、農地などが、それぞれあるべき所にある地理学的地域の意味に近いとみてよからう。H. Overbeck は、言語学の A. Bach に賛意を表して、方言領域と地域とを結ぶものとして交通集団 (Verkehrsgemeinschaft) の存在を説いたが⁽¹⁶⁾、むしろわれわれは、このような集団を支えるものとしての地域を前提とし、その地域の機能をあらわす媒体として交通集団を考えるべきである。

しかし言語学者の関心が、このような地域自体を明らかにすることにないのは、いうまでもない。地域は、言語研究の条件にすぎない。地域による言語のちがいをとおして、言語史を構成すること、それが地理的言語学の課題である。したがって、多くは各語ごとの等語線の設定にとどまり、等語線相互の重複からなる方言領域を通して、地域の構造に迫ろうとするものではなかった⁽¹⁶⁾。だが今日では方言研究の中に構造言語学の体系を導入して、地理的構造言語学を樹立しようとされているのが、関心をひく。

Herder 以後、C. Ritter をへて地表の学として近代化した地理学にとって、言語のとりあつかいには種々の異説がある。いまこのことを不問にして、言語分布に注目した研究をとりあげるとすれば、まず方言領域と自然的境界との間に関係のあることを指摘した E. Mertes の論考をあげるべきであらう(17)。W. Behrmann と O. Maul 編集の Rhein-Mainischer Atlas(18) におつても、方言領域に地理的なまとまりのはっきり認められるところがある。これらの事例のひとつは、E. Oberhammer が Geographie und Sprachenkunde の中で、たくみに整理しているし、フランスでは、A. Demaugen の概論(19)がある。なお Maul は Politische Geographie, Berlin 1925 の中で一章を設けて、地理的現象としての国家と言語集団との間に密接な関係があることにも言及した。その後、H. Overbeck と G. W. Sante の研究によって、ザール工業地帯では、旧封建領域(トリアとパルツ)の境界が、トリア・モゼル方言領域とパルツ・ライン・フランケン方言領域との境界にもうけつがれており、他方、文章語の拡散には現在の経済中心からの影響が強いことが判明した(20)。よく似たことは、ライン・ウエストファリア旧州境地方でも認められる。有名な子音移動の Benrath と Urding 線も、歴史地理的諸条件と関係が深い(21)。

このように、方言領域は地理学上のあらゆる機能領域と深いかわりをもつ。したがって一般的には、方言領域こそは、いかなる個々の機能領域にもまして、「全体としての地域」のひろがりをはっきりとあらわすばあいが多くと判断してもよいのではあるまいか。

日本の事例についても、このことは地理的言語学の研究成果を利用して十分に実証することができる。まずクニレールの事例として、信州と飛騨をわかち信飛国境をとりだしてみよう。この東西で、例えば(目を)洗うが、東で to: ziru、西で dandziru ときれいに対立している(22)。クニ境によって言葉のちがう事例は、その他にもきわめて多

い。たくみに自然的單元を活用した古代以来のクニが、久しく地域としてのまとまりをもち、独特の機能をはたしてきたことを傍証するものであろう。

しかしクニとクニとの隣接地帯では、交通路を介して、部分的に共通した特徴をもつ小領域が芽生えることもある。信飛国境の両側にある奈川と高根とは野麦峠を通じる曲りくねった山道で結ばれているが、この道は、明治末年までは、信濃と飛騨とを結ぶ幹線道路であった。奈川と高根は、この道によって交流し、婚姻関係もかなり強かった。したがって、クニを異にするにもかかわらず、共通の言葉も少なくない⁽²³⁾。

複数のクニを含んだ封建領域レベルの事例も豊富であるが、ここでは逆に、クニの内部に、小藩の分立した事例として、松本藩（六万石）と松代藩（一〇万石）をあげておく⁽²⁴⁾。推量表現の *-zura* と *-darazu* の境界は、両藩の境界とびたりと一致する。そして境界付近のひとびとが、*-zura* を六万石ことば、*-darazu* を十万石ことばと称していること、さらに十返舎一九『道中続膝栗毛』をみると、木曾から松本平にかけて、「土地の者が盛んに使った *-zura* が、善光寺街道沿いに松代領にはいると同時に *-darazu* にかわっていることなどからして、*-zura* と *-darazu* の境界は、旧幕時代からのこの地方の歴史を反映していることがわかる。

現代地理学は、地域の体系的把握について、最初にのべた単位の問題以外にも多くの成果をあげてきた。地域とは、地表における各レベルの機能のひろがりともいうべき機能領域群の複合体であるが、政治的な枠づけがないかぎり、各領域群がびったり重なりあうとはかぎらない。不一致には不一致の地理学的理由がある。しかし地域の諸機能を結節する中心施設は、集積の利益を求めて中心集落を形成しやすいこと、これらの中心機能に方向を与えるものが、さまざまな交通網であり、その領域は中心集落からほぼ一定の行程に限られ、そのひろがりには *Fliese* や *Ökotop* の構

造と関係すること、これらの相互干渉と依存のまとまりとしての動的な地域は、中心集落の中心度に応じて、階層的につきかさなっていることなどについても、体系的に理解されることになった。

ところで生活の場としての地域は、たんなる知的概念として扱いうるほど生やさしいものではない。むしろ地理学的には、社会文化の諸現象こそ、地域に根ざし、その構造に支えられて生起し、均衡するところに、研究の原点がすえられる。最近の計量地理学や社会地理学の諸研究によると、前述の諸事例以外に、文化技術の伝播の方向やその範囲も、かなりの程度にこうした地理的枠ぐみに対応して行なわれることが判明してきた。

言語の分布については、このことが柳田国男の方言圏説の補正の形で適用できる場合のあることが注目をひく。たとえば、長野周辺部におけるアワガ(泡)のアクセントについてみると、アワガが、長野市の中心部から市街の周辺部に向かって放射状にひろがるとともに、南の上田市にもその分布が小さいながら認められる。これは、長野市からの拡散を、中間のアワガ地帯をとびこえて上田市がいち早くとらえ、その周辺にひろめているからである⁽²⁵⁾。また、二つの方言領域の接触地帯についても興味ある現象がみられる。蝶を意味する岡山県側のチヨチヨマと兵庫県側のチヨコが、中間地帯で接触してチヨコマという語形ができた⁽²⁶⁾。

もの言う人間の心に踏み込む方言研究が、生活空間としての地域の構造とのであいをもったことが意味深い。

かつては基礎地域ごとに微妙にちがう言葉のなまりがあり、このことが、住民と住地との一体性を強めるものであった。さらに基礎地域の外方には、それをとりまくように、数次元の地域が上記のような方言のちがいを含んで、い

く重にもひろがってきた。

東条操などの方言研究⁽²⁷⁾によると、日本の方言は、東部方言（北海道方言・東北方言・関東方言・東海東山方言・八丈島方言）、西部方言（北陸方言・近畿方言・中国方言・雲伯方言・四国方言）、九州方言（豊日方言・肥筑方言・薩隅方言）などに大別され、さらにそれらの内部がこまかに区分される。しかし東条の方言領域設定には、主として音韻や文法が基準となっており、かつ大方言領域から小方言領域へと順次細分されたものであるために、地理的言語学からみてもかならずしも満足のいくものではなかった。

そこで、柴田が日本方言の重要な特徴を示すとする八個の語（駅と息との同音、咳をシェキと発音、いうた、空と窓のアクセントの区別、橋・箸・花・鼻の同アクセント、おたげや、家事と火事の区別、何じゃ何じゃ）の等語線⁽²⁸⁾を東条の方言領域に重ねあわせてみると、二―三本の等語線がほぼ一致するところがあらわれる。利根川沿い、新潟県東部から南部にかけての関東との境、親不知、北陸と飛騨・美濃をわかつ部分、名古屋、出雲、本州と九州の間のほか、佐渡・隠岐・八丈島などに、それらがみられる。また、飛騨・美濃や岡山・広島地方には、語等線の重複ではなくて集中もみられる。これらの線をも参照して、上記の方言領域を部分的に再区分してみると、各区画は、民家型などの分布ともある程度重なり、内部には一、二の古い大中心集落がある。これらの区画は、守護領国や藩領を介して、長い歴史の中で形成されてきたプロヴィンシャルな文化の場ともいべき高次元の地域の限界を、大まかには反映しているように思われる⁽²⁹⁾。

ただし近世の城下町などを中心とした物貨の流通圏は、政治的な藩領に拘束されがちで、高次元の地域の限界まではびなやんだ場合も多い。明治の府県は、当時なお未熟だったこれらの地域と、幕藩体制とからむ政治的・経済的

な諸領域との妥協点に形成された。

今日、以上のような各レベルの地域に対応する方言の構造論的研究が進んできたといわれる。それらの構造は、各地域の地理的方式とどこまで関連するのであろうか。

明治以来、近代的な機能領域の網が複雑にからみ、最近ではそれらを驚づかみするように大都市圏や広域都市圏などの鼎立もいちじるしい。注目すべきことは、このような地理的現象の裏側で、旧来の地域やその地理的方式が、変化したというにとどまらず、しばしば解体の危機におちいつていることである。同時に言語活動にも、また古い方言領域にも、はげしい動揺がみられるだけでなく、文法や結語法にも、一部に乱れがあるといわれる。いまや未曾有の混乱を、地域と言語とが共有している。

言語への問いかけは、そのまま地域への問いかけに通じるべきものである。当面少なくともわれわれは、地理的言語学の諸成果を、各時代と各次元の地域の奥深くにひそむ構造の解明によりふさわしい形にあみかえていかなければならない。このことよって、はじめて地域地理学と言語学との相互提携が期待されるだけでなく、地域発生学に終始しがちな歴史地理学にも新生面がひらかれるであろう。それはまた、新生すべき歴史地理学が、地域の青写真や文化の行先にたいして独自の発言権を確保する一方途でもある。

言語と地域との関連は、以上のことがらにとどまるものではない。近代国家の母胎となった民族領域は、同一言語の分布範囲とほぼ重なる場合が多い。しかし国土と、国語のひろがりとの間にみられる不整合に端を発して、さまざまな民族問題が地表に暗いかげりを投じてきたことについても、みのがすことはできない。

注

(1) J. G. Herder: *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*. 1773. 木村直司訳 言語起源論 大修館

(2) G. Mounin: *Saussure ou le Structuraliste sans le Savoir*. 1968. 福井芳男・伊藤晃・丸山圭三郎訳 ソシユール——

構造主義の原点 大修館

(3) J. Schmithüsen: *Fliesengefüge der Landschaft und Ökotopt. Vorschläge zur begrifflicher Ordnung und zur Nomenklatur in der Landschaftsforschung. Berichte zur deutschen Landeskunde* 5. 1948.

Physiotop は無機的な地表単元 (J. Solch の Physio-chore)。そこに生物社会の立地する場として Fliese (site) が形成される。Fliese のおびきり (Fliesengefüge) の上に生物社会が立地して Ökotopt などある。以上は C. Troll が地域要素 (Landschaftselement), Paffen が地域細胞 (Landschaftszelle) などよぶもの、地域においては、その部分としての農地・集落・交通路などの形に再編される。

(4) それは主として、生態地理学と社会地理学との接触部門の研究というべきであろう。なお、「機能されたもの」とその機能のおよぶひろがり (機能領域) とは、かならずしも一致しない。例えば、商業機能をもたされた商店街をはるかにこえて、その商圏はひろくまわりにのびている。われわれは、これらの個々の機能領域を、「全体としての」地域の生理 (機能) の部分的な顕在化とみる (拙稿 地域の形態・機能・構造、織田武雄先生退官記念人文地理学論叢、柳原書店)。

(5) 拙著 社会集団の生活空間——その社会地理学的研究 大明堂

(6) N. Chomsky: *Syntactic Structures*. 1957. 勇康雄訳 文法の構造 研究社。Aspects of the Theory of Syntax. 1965.

(7) I. Piaget: *Le Structuraliste*. 滝沢武久・佐々木明訳 構造主義 白水社

(8) 山口恵一郎 地域名称の意義——地域形成の歴史地理—— 歴史地理学紀要7。地名研究については、内外の地理学者によるすぐれた成果が少なくない。

(9) 柴田武 言語地理学の方法 筑摩書房

Physiotop	phoneme (音素)
Ökotopt	moneme (記号素)
Landschaftsteil (人間化した Ökotopt)	word (語) phrase (句)
最小の Landschaft	sentence (文)

- (10) P. Guiraud: *La Semantique*. 佐藤信夫訳 意味論——ことばの意味——白水社。もちろん「言語場」が、つねにその言語活動の行われる実際の地域の姿を反映するものとはかぎらない。意味の世界は、飛躍にみちた概念連合のはたらきによって、独自の多様さをもつからである。なお、「言語場」とか「意味場」とかいわれるものは、たがいに重なりあい、滲透しあっていて、たがいに排除的なものではないと考へるべきであらうが、こうした性格は、地域相互の間にもみられることがある。しかし、地域相互間の交錯と競合、重層関係については、なお解明すべきことが多い。
- (11) G. Mounin: *Clefs pour la Linguistique*. 1968. 福井芳男・伊藤晃・丸山圭三郎訳 言語学とは何か 大修館
- (12) 三上章 現代語法序説 金田一春彦 日本語 岩波書店
- (13) Saussure は、「言語学の唯一の固有の研究対象は、言語以外のなにものからも導きだされない、そのような独自の体系としての言語それ自体であり、言語学とは、このような自律的な対象をそれそのもののために追求するところのものである」(p. 17) である。
- (14) G. Wenker: *Sprachatlas von Nord- und Mitteleutschland*. 1881. 馬瀬良雄 言語地理学——歴史・学説・調査法——解釈と鑑賞(三四)の八たよる。なお地理的言語学は、一般には言語地理学と慣称されている。
- (15) H. Overbeck: *Die deutschen Ortsnamen und Mundarten in Kulturgeographischer und Kulturlandschaftsgeschichtlicher Beleuchtung*. *Erdkunde* 11, 1957.
- (16) 地理的言語学 G. Th. Frings の指摘をきくべきではなく、地域は個々の事象のばらばらな空間的ひろがりとしてあるものではなく (Sprachgeographie und Kulturgeographie. *Zeitschr. f. Deutsche*. 44. 1936)。ここでもうひとつ注(4)の内容を参照された。しかし、地域を個別研究のためのたんなる将棋盤とみる旧説は、意外に地理学界にも根強く残存している。
- (17) E. Meres: *Dialektgeographie*. *Geogr. Zeitschr.* 1922.
- (18) W. Behrmann und O. Mau: *Rhein-Mainischer Atlas für Wirtschaft, Verwaltung und Unterricht*. Frankfurt a. M., 1929.
- (19) E. Oberhammer: *Geographie und Sprachenkunde*. Hermann-Wagner-Gedächtnisschrift. *Petermanns Mitt.* Ergänzungsheft, 209; A. Demangeon: *Géographie des Langues*. *Annales de Géographie* 1929.

- (20) H. Overbeck und D. W. Sarré: Saar-Atlas. Gotha 1934.
- (21) P. Schöller: Die rheinisch-westfälische Grenze zwischen Ruhr und Eifelgebirge. Ihre Auswirkungen auf die Sozialund Wirtschaftsräume und die zentralen Funktionen der Orte. Forschungen zur deutschen Landeskunde 72, 1953
- (22) 馬瀬良雄 方言意識と方言区画——信飛国境地帯を例に——日本の方言区画 東京堂
- (23) 前掲論文
- (24) 馬瀬良雄 言語地理学——歴史・学説・調査法—— 解釈と鑑賞三四の八
- (25) 馬瀬良雄・穂苅喜代子 川中島平及びその周辺地方のアクセント分布とその推移——2モーラ名詞を中心に—— 長野短大紀要一九。中心集落と周辺地方との関係は、ドイツなどの地理的言語学でも、くわしい調査が進んでいる。
- (26) 鏡味明克 播備国境言語地図論集 平山輝男 日本の方言 講談社
- (27) 東条操編 日本方言学 吉川弘文堂
- (28) 柴田武 日本の方言 岩波書店
- (29) 拙著 地域の論理——世界と国家と地方 古今書院